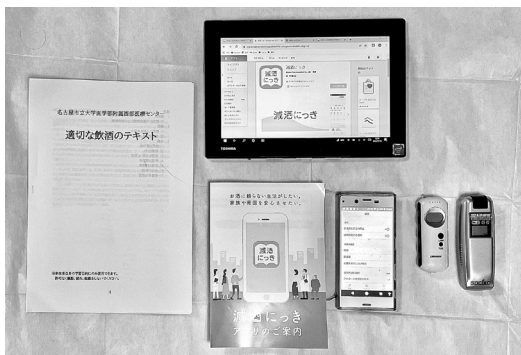


アルコール飲料の飲用に関する 情報介入研究

菊地 基雄 ●名古屋市立大学医学部附属西部医療センター 教授(診療担当)



情報介入に使用する機材の一部

1. 背景と目的

不適切な飲酒習慣により、癌(大腸、食道、喉頭、乳腺)の発症や治療抵抗性、認知症、糖尿病、動脈硬化性疾患(冠動脈疾患、脳卒中)、骨粗鬆症(要介護となる最大の原因)の発症率が悪化することは、従来の基礎的、疫学的研究で明らかである。飲酒による社会的損失は4兆円超に達するとされる一方で、飲酒習慣の改善施策に繋がる科学研究が達成されていない。COVID-19感染症の流行下、自宅での飲酒行動の変容が報道されている他、癌検診の受診率も著しく低下しており、住民に対しての飲酒に関する啓蒙啓発、行動変容が喫緊の課題である。

名古屋市北区を中心とする名古屋北部の医療圏では住民の高齢化が進んでおり、飲酒に関する保健医療サービスの需給の問題点を明らかにすることで、新たな地域包括ケアの策定につなげられる。不適切な飲酒行動を是正することで、様々な疾患の罹患発生率を抑制し、健康寿命の延伸を図ることを可能とする。

2. 取り組みの方法

私たちは様々な栄養障害が疾病の発症に関連することを報告してきたが、本研究では

飲酒習慣を有する地域住民集団に、電子デバイスや成人の教育手法を用いた科学的な介入を行い、不適切な飲酒習慣を改善させ、効果を多角的に評価し、データサイエンスを駆使して疾患予防の可能性を明らかにする。

本研究は、地域住民において飲酒習慣のある住民を対象として行う前向き研究で、WHO(世界保健機関)-AUDITにより飲酒態度を把握し、医師、薬剤師、保健師、看護師、管理栄養士、ケアマネージャー、医療ケースワーカー等多職種による飲酒による健康被害についての講習会・ワークショップを開講し、その後生活態度の変容を科学的に経過観察するものである。

対象を以下3群に分ける。

介入A: ポータブルデジタル入力機器にアプリケーションを用いて、毎日飲酒行動記録を行う。**介入B:** 6カ月の間2カ月ごとに継続的な講習会を受講する。**介入C:** 6カ月間は毎日呼気アルコール濃度を測定する。

そして、生活習慣の変化を調査用紙により記録するほか、健康プロファイル型尺度(SIP、およびHUI)は定性的コーディングを行い、コードマトリックス分析を行う。

3. 期待される成果

多職種が関与する今回の研究・実践により、飲酒に関する保健医療サービスの需給の問題点が明らかとなり、新たな地域包括ケア・健康寿命の延伸につながる事が期待される。

不適切な飲酒習慣を是正するため、研究に参加した地域住民の中から適任者を適正飲酒促進ファシリテーターとして養成し、不適切な飲酒をしている地域住民に対する啓蒙・教育・指導者になってもらう予定である。